



No.347

2018年6月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所
発行所 出雲路 善公
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
\*毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社

念じられ
照らされて

南無阿弥陀仏の融雪装置

藤原 千佳子

草木は捨身のぼさつ野
のみどり山のみどりに
みちみちたもう

夏まではとうてい融け
そうにないと思つた程に
境内を埋め尽した大雪も
あとかたもなく消え、今
は右の短歌のように木々
のみどりの美しさに包ま
れています。今から夏に
なると更に大きな枝を伸
ばして繁り、秋には紅葉
し、そして冬が来れば散っ
ていく。この姿はちよう
ど私たち人間の一生(生
・老・病・死)を「身を
捨てて教えてくださって
いる菩薩さまのようだ」と
詠ってくれた今は亡き
友を偲んでいます。同じ
くこの春にはなつかしい
人との別れが相次ぎ、
「待った無し」の命のき
びさを知らされました。



〔略歴〕
一九四二年三重県桑名市生まれ。金沢教区浄秀寺前坊守。著書に「慈光はるかに」I・II・III(浄秀寺)、「みひかりに遇いて」(大谷婦人会、法話CD)、「お念仏に遇いて」(東本願寺出版)がある。

そんなお一人に、あるお
婆ちゃんとの別れがあり
ました。
年に一度、春先のまだ
雪の残る頃、もう二十年
以上も法縁をいただくお
寺があります。そこにい
つもお参りして下さる
お婆ちゃん九十二歳で
した。五年程前に私に尊
い言葉を残してください
ました。その頃お歳も
八十五、六歳で杖をつい
ておられたから、今年
のこんな雪の深い寒い日
にはきつとお参りできな
いだろうなあと思つて本
堂に入ると、一番前のい
つもの席にちゃんと座っ
ておられました。「よかつ
た」と嬉しい気持で法話
させていただきました。
お昼休み、杖をつきな
がら部屋をたずねてくだ
さいます。

ちゃんの融雪装置は持つ
て歩ける」と。そのあと
「どんな煩惱の猛吹雪
やら大雪でも、南無阿弥
陀仏の融雪装置が融かし
てくださるからありがた
い」と言われたのです。
この言葉はありがたかつ
たです。これはお婆ちゃん
の仏法の智慧から出た
お言葉なのです。学校
出たから、勉強したから
といつて出る言葉ではな
いのです。それこそ実際
日々そのお念仏のおはた
らきに遇つておられるか
らこそ、ふつと出たので
すね。「持つて歩ける融
雪装置」がある。また、
煩惱の雪が一遍融けたか
らいいかという、そう
じゃない。また降る。そ
うのたびに南無阿弥陀仏、
南無阿弥陀仏...とお念
仏申される。ご苦労の多
かったその身を通して聞
きぬかれたお婆ちゃん。
煩惱そのものがなくなる
のではなくて、そのこと
に苦悩する思いが融ける
のでしよう。柔和なお顔
がそのことを証明してく
ださっている。

また、この一人のお婆
ちゃんの救いの世界は、
決してお婆ちゃん一人
の世界に閉じこもつては
いけない。かならず周りに
波及するはたらきがあり
ます。それはお婆ちゃん
自身の努力ではなく、そ
こにはたらいっている大悲
そのものが波及するので
す。仏さまのお仕事なの
です。今は亡きお婆
ちゃんですがその時の出
遇いが今も私の中に生き
続け、よびかけてくださ
っています。
「満足大悲」というお
言葉があります。これは
私の願いが満足するの
ではなく、仏さまの願い
が満足する。どこに満足
するのか、誰でもないこ
の私の身に苦悩を縁とし
て満足してくださる。こ
の私の苦悩がなかつたら
仏さまの大悲のはたらく
場がないのです。どうに
もならない苦悩を生きる
身に、お念仏が大悲心と
して届いてくださいま
す。

別院定例法座 午後1時から

6月28日 親鸞聖人ご命日法座

講題 「街道と真宗寺院」

講師 白尾 匡氏 (長圓寺)

7月3日 三日のご坊

講題 「伝わらない」のはなぜか
- 報恩講、新たな伝統への模索 -

講師 旭野 康裕氏 (永養寺)

飛驒御坊御遠忌テーマ リレー随筆 ④

雑行を棄て、本願に帰す

「ごほつき、お大事に」

「ごほつき、お大事にしてください」。遠く新潟か
ら、高山二組親鸞教室に向き、ご講義いただいた齊藤
研さんに教えていただいた、大切なお言葉である。
「ごほつき」とは、「ご法器」、私たちの身体をさす言
葉だそう。一人ひとりが「仏法を入れるための器」な
のである。「仏法を入れる(仏の願いを聞いていけ
る)のは、あなたという尊い器なのです」と、一人ひ
とりに呼びかけてくださっている阿弥陀さまからのお言
葉だと感じた。

しかし、私たちは、真実を見失い、道理に迷う凡夫で
もある。「凡夫というは、無明、煩惱われらがみにみち
みちて：(『一念多念文意』)と告示いただいたよう
に、私たちの器には、空っぽならまだしも、すでにあふ
れんばかりの無明・煩惱がみちており、残念ながら仏法
が注がれる余地が残されていない。阿弥陀さまからい
ただいた「ご法器」という尊い呼びかけにお応えするに
は、どうしたらよいのだろうか。みちみちて器に入つて
いる無明・煩惱を、少しでも捨て去り、仏法が注がれる余地を確保するこ
とであろうか。

仏法は、しばしば海や水に喩えられるが、それに加えて「響き」に喩え
られることもある。「響き」という現象は、「障害物」がつくり出す現象だ
そう。コンサートホールで聞かれる美しい響きは、床や天井や壁という
障害物が巧みに共鳴し合つてつくり出される。響きは、障害物があつてこ
そ、大きく、広く、深く、豊かになるのだ。

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山
に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快し
まざることを、恥ずべし、傷むべし、と。(『教行信証』信巻)」と、仏法に
背き、妨げる我が身であることを見つけた親鸞聖人に、仏法はどれほ
ど大きく、広く、深く、豊かに響いたことだろう。また、親鸞聖人のいた
だいた響きが、幾多の先達と響き合い、豊かな法器の共鳴となつて、今、
私たちのもとへ届けられている。仏法を注ぐ余地のない器であるが、仏法
の響きを感じ、受け止め、響き合えるのは、仏法に背き、仏法を妨げる、
無明・煩惱にみちみちた私たちという器だけなのだ。反対に言えば、仏法
の響きこそが、仏法が注がれる余地のない器であることを知らせる。

「本願に帰す」と宣言された親鸞聖人。これは、自らの手で本願を選ん
だのだという宣言ではなく、「あなたこそ仏法を入れられる法器なんだ」と
呼びかける本願に響き、本願に自己(器)を獲えられたお言葉だったので
はないかと感じている。
皆さんもご法器お大事に、来年の御遠忌法要に出会いましょう。響き合
いましょう。

圓徳寺住職 窪田 純

☎テレホン法話(0577)34(2313) ○6月21日~30日:谷本きみ子氏「久々野教念」

○7月1日~10日:五辻元駐在「高山教務所」

○7月11日~20日:小原宗成氏「圓龍寺」

宗教トラブル相談窓口(0577)321-0763



家族で話そう

人生の

「こんなこと」「あんなこと」

佐賀枝 夏文

サガエさんだより

ボクが勤務しているのは、東本願寺の飛び地境内にある高倉幼稚園です。園長さんとして着任早々は、園長さんらしくと見せかけてカッコつけていたのですが、このごろは、幼稚園の先生が頼りないボクを、やさしく見守ってくれているので、力まずに過ごさせてもらっています。肩の力を抜いてみると、いままでは違う輝く世界を味わうことができました。力んで気負っていたときには見えなかった世界でした。ボクは、周回遅れのランナーになってみて、ひとり、ひとりの先生方の「やさしさ」がこころに沁み込んでいます。園長さん「らしさ」を見せかけているときの、しんどさと緊張感から解放されました。降参してみてもわかる世界かもしれません。ボクは長い間、負けてはならないと戦っていたように思います。「戦う」「競う」から解放されて「見えた世界」でした。

「承の物語」

さて、今回は「起の物語」に続く、次の「承の物語」の青年期についてお話することにします。青年期は、人生において「さまざまな出会い」の時期といえます。青年期は誰もがはじめてづくしの出会いと遭遇の時期といえるかもしれません。

わたしたちが生きている「時代と社会」は、経済中心の競争社会といえるかもしれません。かつて農業中心であったムラ共同体の社会が、明治以降、産業中

心の近代化した社会へと変化しました。産業中心の市場経済社会として発展しました。この市場経済は、売り手と買い手がいて成り立つ社会です。売り手が複数になると、そこで「市場原理」がはたらき競争が始まります。お互いに価格競争と品質向上で競い合います。この競い合いは快適なことや問題など、さまざまなことをうみだしました。若者たちは、いつしか競争に参加することになります。この競い合いは、さまざまなところであたり前に行われています。身近な学校、働く場でみんながしのぎを削っています。

青年期の「承の物語」では、競い合いのなかで課題を抱える時代といつてもいいかもしれません。なかには、人間関係のなかで傷つく青年もいます。大なり小なり人生の課題を抱えることになると思います。

仏教と社会

現代のこの社会は、いうならば人びとが「よかれ」とつくりあげた社会です。「よかれ」とみんなが懸命につくりあげてみると、格差社会をはじめ、さまざまな不都合もみだしてきました。この社会には当たり前のようにある一つの考え方が貫かれています。それは、なにか問題が起これば、その原因となる「たね」を取り除けば、もとの健康に戻れるという考え方で

す。この考え方は、自然な考え方のようです。すから、多くの人びとの賛同を得るとおもいます。そのなかで「やっかいなこと」が次から次へと排除されてきました。たしかに、このことで快適な社会や生活が実現したかもしれません。これは、人間の都合なことを除いてきた歴史といえるかもしれません。これは、一面の道理かもしれませんが、不便や不都合を除けば、より快適になると考えることに通じます。そして、同じことをくり返すかもしれません。



仏教の説く世界に出会った糸賀一雄先生

ここで、仏教の説く世界について考えてみることにします。糸賀先生は、重い障がいをもった子どもたちの施設である滋賀県にある「近江学園」をつくり上げたおひとりです。先生は仕事半ばで結核の病に倒れ、療養生活をするようになりました。この療養生活で仏教の説く世界に出会われることになりました。当時、障がいのあるこの子どもたちに、あなたの愛の手をお願いします」というのが一般的でした。糸賀先生は、仏教の説く世界に導かれて、転換ともいえる「この子らを世の光に」という実践を言葉にしていたいただきました。わたしたちのこの社会は強く主張しない弱い立場の人にはつらい社会です。それは暗闇の社会といえるかもしれません。この暗闇の社会を照らす「ともしび」が、この子どもたちですと主張されました。

この社会を負けじとみんなが競い合えば、人びとは傷つけ合います。そして、「よかれ」とさまざまな問題を取り除こうとしますから、つらい、悲しいおもいをする人もいます。仏教の説く世界は、「さわり」「さまざま」は転じて、転換すれば、と説いています。では、今回筆に尽くせなかつたことは、また次回とします。

今回は藤場芳子さんの「女と男のナムミアダブツ」です。

公開学習会(第二回)

日時 6月28日(木) 午後7時半  
会場 高山別院 仮本堂  
講師 海法龍氏 (東京教区長願寺)  
内容 歎異抄第十三章  
聴講料 500円  
主催 高山二組若声会

「2」回壇案内

- 30日(土) 西方寺「清見町」
- 1日(日) 光雲寺「萩原町」
- 7日(土) 頓乗寺「萩原町」
- 8日(日) 速入寺「石浦町」
- 11日(水) 願生寺「岡本町」
- 13日(金) 淨福寺「小坂町」
- 14日(土) 永養寺「萩原町」
- 15日(日) 往還寺「之宮町」
- 16日(月) 慈雲寺「萩原町」
- 17日(火) 賢誓寺「萩原町」
- 19日(木) 久々野教会
- 21日(土) 法正寺「朝日町」
- 22日(日) 西教寺「朝日町」

子ども奉仕団

期日 7月29日(日) 31日(火)  
会場 東本願寺(京都市)  
参加費 12,000円  
対象 小学校4〜6年生 (食費・保険等含む)  
定員 40名  
締切 6月29日(金)  
※お手次のお寺もしくは高山教務所にお申し込みください。

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

吉城組 御遠忌 讚仰法要 勤まる

6月3日、南春寺(国府町)にて高山教区・高山別院宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌のお待ち受けとして吉城組で讚仰法要が勤まり、112名の方々が参拝されました。お勤めは同朋唱和で行われ、満堂の人々の声が本堂に響き渡っていました。



講師は木名瀬勝氏(東京教区)。講題は「なぜ聖人は関東に赴かれたか」。宗祖のご生涯を通して、今を生きる私たちの課題をお話いただきました。

佐奈姫忌法要

佐奈姫(1633年~1667年)は、東本願寺第十三代宣如上人の娘で、照蓮寺宣心にわずか9歳で嫁ぎ、35歳の短い生涯を終えました。その墓前で法要を営み、聞法の座をもちます。



日時: 6月26日(火) 午後1時30分から  
会場: 佐奈姫墓所・松本公民館(高山市松本町)  
法話: 高山別院輪番 三島 多聞

※別院から送迎があります。現地には駐車場がありませんので、参拝される方は午後1時までに別院事務所に集合ください。